
装甲鍛冶師・衛宮

呉璽立児

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

装甲鍛冶師・衛宮

【Zコード】

Z0307Z

【作者名】

吳靈立児

【あらすじ】

第五回聖杯戦争……その決着後、答えを得たアーチャー・英靈工ミヤが呼び出された世界は剣鬼ツルギという銘の鎧武者達が戦う世界であった。

この世界に呼ばれた目的が分からぬまま、ヒミヤは戦いに巻き込まれていく。

赤い外套の蝦夷（前書き）

この小説は、F a t e / s t a y n i g h t + 裝甲悪鬼村正のクロスオーバーSSとなります。

二次創作小説が苦手な方、両世界觀を壊して欲しくない方は、申し訳ありませんがお戻り下さい。

また、本小説は両ゲームの多数のネタバレ、個人解釈を含みます。未プレイの方や、プレイ途中の方は、クリア後に読むことをオススメします。

赤い外套の蝦夷

体はツルギで出来ている。

血潮は鉄で　心は硝子。

幾たびの戦場を越えて不敗。

ただの一度も敗走はなく、

ただ一度の理解もされない

彼の者はここに独り、ツルギの丘で勝利に酔つ

故に、生涯に意味はなく。

その体は、きっとツルギで出来ていた。

「答えは得た。大丈夫だよ遠坂、オレも、これから頑張つていくから。」

それが私の一度目の遠坂との別れだった。

第五回聖杯戦争……またもや勝者は無く、聖杯の破壊という結末でシナリオは幕を閉じた。

私は英靈としての座に戻る。

だが、私は一度と道を間違える事は無いだろう。幾つもの残飯処理を担わされたとしても折れぬことの無い、剣を今ここで打つこと

にじょり。

F a t e / s t a y n i g h t + 裝甲悪鬼村正
クロスオーバーISS

装甲鍛冶師・衛宮

第一章・赤い外套の蝦夷

英靈に休息など無かつた。

私は再び地に足を着いていた。

「まったく、週休2日制という言葉を知らんのか奴は「

悪態を付ぐが聞くものはいない。

それにもしても、ここは何処であろう。

周りは一面の草原。

何もない……いやそうでも無さそうだ。視線の先には集落が見える。

「一体、何時の時代だ」

集落は藁屋根の家屋の日本家屋だ。

前にいた世界と比べると大分前の時代に飛ばされたのだろう。

「それにも、2度も日本に呼ばれるとは……」

何の因果であろうか。

だが、1つ疑問が浮かぶ。

呼び出されたのは、戦いの場では無いということだ。

どちらにしても、何らかの尻拭いをさせられるのは、確定事項だ。

「お若い方そこで何をしておられるのか？」

そう言い、話しかけてきたのは、いかにも農民といつ中年の男で

あつた。

「いや、特に何をしていた訳でもないのだが……」

「気づけばここにいたと言う言い訳は理解できない、と思いいかにも怪しい人物です、といついい訳をしてしまつ。」

「ぬ……その肌、その髪、お主蝦夷か……」

エミシ……あまり、聞き覚えの無い言葉が出てくる。

知識としてないわけではない。

坂上田村麻呂……彼のものが、征夷大將軍に任命され東北の蝦夷を討つたということぐらいしか解からない。

それが、何故私に向かつて使われているのだろう。

「六波羅の者か？」

单刀直入に農民が聞いてくる。

「いや、そのようなものに属しているつもりは無い」

聞き覚えがない単語が出てきた。

いかにもこう敵意を向けられてしまつと、幾ら真実を言つたところで効果は無いだろう。

「と、とりあえず、一緒に来てもらおつか」

靈体化しても、通常の人間を遙かに上回る身体能力で逃げるのも良いのだが……流にみを任せののもまた、一驚か。

「解かつた。同行させてもらうとしよう」

もしここが何らかの戦いに呑まれるとするのなら、私がいふことでこの者達が助かる可能性もあるだろう。

私は農民の後に付いて行き村長の家に向かつた。

向かう途中突然背後から殺意が向けられる。そのまま切り込み来るぐらいの勢いだ。

“^{トースト} 投影、^{オノ} 開始”

自分の貯蔵の中から、慣れ親しんだ剣を取り出し、そのまま相手の剣を受け……

「な……！」

目の前にいたのは3mほどの大きさの鎧武者だった。そして再び驚愕する。

かんしょうばくや
干将莫耶が出てこない。

「……動くな」

鎧武者が言ひつ。

首筋に刀を向けられる。

「私は、しがない旅者だ。出来ればその刀を下ろしていただきたいのだが……」

「ただの旅人が殺氣に気づくものか？」

無音が場を支配する。

「だが、蝦夷の刺客もいか……よほど貴様が特殊でなければなスツと刀が下ろされる。

今度こそ村長の家に通される。

「刺客でもないと言つのうたつこと去るがいい」

あつという間に解除、霧散してしまつた鎧武者を脱いだ武士がそう言つた。

「あの鎧は何なのですか？」

自分に相応しくない、丁寧な言葉だと心の中で苦笑する。

「蝦夷の癖に、剣胄を知らぬといつのか！」

ツルギ……と呼ぶらしい。

瞬間、頭の中で力チリと回線が繋がる。

剣……ツルギ

剣胄……ツルギ

2つのツルギが交叉する。
頭の中を刃音が鳴り響く。
体中に溶鉱が流れる。
熔けた玻璃が心を満たす。

最後に見たものは……結晶だ……
それは禍々しく、鋭く、無機質だ

そして、何よりも美しかった。

赤い外套の蝦夷（後書き）

始めまして、呉璽立児と申します。

今回、初めて投稿する事になった小説は、*Fate/stay night* + 装甲悪鬼村正のクロスオーバーSSです。

何分、小説初心者な者で至らぬ点が非常に多いと思いますが、原作様やクロスオーバーSSの先人様に恥ずかしくない物を書きたいと 思います。

これから徐々に投稿していくので、読んで頂けたら、大変嬉しく思 います。

また、感想、コメント等をもらえたならこれからの参考にもなります し、当方も大変嬉しく思いますのでよろしければ送つて下さい。

H///ヤの世界（シリルギ）（前書き）

お待たせしました。2話目です。

話のペースですが、大体3話以上で村正本編の1話が終わるペースで書いていきたいと思います。細切れに投稿という形になってしまいますが、どうかお付き合いで下さい。

HIMAYAの世界（シリルギ）

空はいつの間にか真紅に染まっていた。

私は、座敷布団に寝かされていた。

近くにはあの武士が私を見張るよじに鎮座していた。

「目が覚めたか……」

「何が起きたんだ」

「貴様は、話の途中に倒れたのだ。そして、もう逃げる事も出来ない……」

「何？」

家の外の気配を探る。とても平穏とはいえない気が漂っている。

「六波羅ろくはらが来たのだ」

六波羅……それがこの村の外敵らしい。

「俺は行く。匿つててくれたこの村を危険に会わす訳には行かぬのでな」

武士は立ち上がる。

「貴様が敵だとしたら、寝首を掻いておけば置けば良かつたのだがな」

死地に赴く武士はそう言つ。

「お前の名前は何といつ。俺は垣かくい見と言つ

「私は……」

私は本当の名を呼ぶのを躊躇つ。

だがその思いはあの戦いで討ち絶つた。そう私は紛れもなく。

「私は、HIMAYAシロウと言つ」

「そうか、HIMAYA。お前が私の敵にならぬことを祈る」

そう言い残すと垣見は家から出て行つた。

「いけない」

「戻つて、お武家さん」

「駄目だよ、殺される」

「お武家さん」

村人から口々に上がる、制止の声

それらへ、垣見は一言だけ返した。

「世話になつた」

私はそれを遠目から見ていた。

六波羅と呼ばれる軍団は、あの垣見と呼ばれる男と同じ鎧を着ていた……いや、違うアレは鎧なんかではない、アレこそがツルギ。

「^{トレス}同調、^{オン}開始」

アレを解析する。

アレの銘は剣胄

……

そうか……

理解する。

やはり、この世界来て変わつてしまつた。

私にとつて剣^{ツルギ}とは剣胄^{ツルギ}なのだ。

霧が晴れた。

自分の世界が見える。

其処には過去に無限数の剣があつた。

だが今はどうだらう。

この世界の理と自分の世界が混ざり合つたであらうか、無数の剣胄が散在していた。

すなわち、私の世界の剣が剣胄へと変換されていた。

垣見は更に進もうとした。

その手を童女が掴んだ。

垣見は黙つて娘を見た。

片手を伸ばして、そつと頭を撫でた。

それから、引き止める手をそつと放させた。

童女の瞳が潤む。

振り切るようにして、垣見は前へ進む。

軍部隊から幾人かが、捕らえようと武器を抱えて飛び出そうとした。

だがそれを片手の一振りで遮り、部隊長がただ一人、垣見を迎えて進み出る。

村と軍の中間で二人は向き合つた。

「……何のつもりだ？」鶩沼

垣見は敵意を隠してそう言つ。

「昔の上官に敬意を示しただけですよ。垣見少佐——元少佐

鶩沼という男は嫌味をいづのように垣見を挑発する。

「…………」

垣見はその様な挑発には乗らない。

「村を見逃すとの事に偽りはなかろうな」

「貴方の身柄を差し出すなら、村の罪は問わない。言つたとおりです」

鶩沼は詰まらなさうに返す。

「ならば良い」

垣見は安心したかのようにいきを漏らす。

「で……？ 貴様、よもや本氣で俺と仕合ひ気か」

今度は垣見が挑発する番だ。

「後ろの味方を持んだほうが良いのではないか」

鶩沼は自信満々に言を返す。

「何故、そんな必要があります？」

「…………」

「貴方は一騎打ちで敗北を知らないことが自慢でしたな。生憎、そ

のような名誉を抱えたまま地獄へ行かせてはやれません」

剣胄で顔は見えないがこれから言う言葉を前に鷺沼は感情を顕わにした。

「現世へ置いていつて頂く。六波羅に叛いた者の最後には、一片の名誉とて相応しくない」

そう語る鷺沼を前に、垣見は感心する。

「見れば、双輪懸もかなわぬほど母衣^{ほろ}が傷んでいる様子。地上にて、太刀打ち仕ろう」

垣見がニッカリと笑う。

「見上げた大言壯語だ、鷺沼。あの青一才^{一才}が、吹くようになったものよ」

垣見が腰の刀に手を搔ける。

片や入念な整備の元、万全な機能を保つている94式竜騎兵。片や損傷をそのまま、性能が劣化するままに放置されている90式竜騎兵。

「……貰^うるのはこちらだ、垣見。その皺首を着に並^ない酒を飲める今宵が、今から楽しみでならぬ」

旧縁持つ二人はそれで対話を切り、共に太刀を抜き放つた。

美しい、そう私は思う。

様々な戦いの場を経験してきた私ではあるが、このような刃音がしない戦いは始めてであった。

刹那で終わってしまうからこそ、無音

不動……だが、お互いの視線が刃のようぶつかりあうような、

有音

刹那の戦いを知らぬが、長年の経験が垣見の不利を知らせる不穏な気配を感じたか、村人が「お武家さん」と声を投じた。その声が背を押したのかかもしれない。

垣見が動いた……。

一瞬。

「……鷺沼……」

「ふ、ふふ……ふふふ」

決着はついた。

勝者の笑いと、敗者の無念。

「既に先のない身だ。相打ちでも良からうに、無用の欲をかきおつ

て」

「ぐぶつ……」

垣見の太刀が、斬り上げることはなく。

鷺沼の一刀は、見事に喉を貫いていた。

この決着は互いの心構えの差であった。なぜならば、

「俺は相打ちでも良いと、腹をすえていたぞ」

鷺沼はもうす。

この男は解かつていた。垣見の技量を知るからこそ、刹那に喉笛

を射抜くことしか考えていなかつた。

だが、垣見は勝ちを欲しがつた。

「死ぬがいい」

鷺沼は腰刀を抜くや、打ち負かした敵の首を刈り取つた。

部隊の一人が、鷺沼に村をどうするかと問つた。

「先刻言つた。垣見を差し出せば、村は咎めぬと」

「あの村は、垣見を差し出したかな?」

その言葉に嫌な感じがした。

村人は、垣見を庇つた。

垣見は自ら鷺沼の前に出て行つた。

「反逆の芽は刈らねばならぬ」

小さな村の悲劇が始まろうとしていた。

兵士達はまるで狩をするように村人を殺していく。

「つク」

その時私の目に一つの光景が映った。

垣見を引き止めた、童女が無残にも剣冑に切り殺されようとしている瞬間であった。

私の体は反応的に動いた。

普通の人間ではありえない速度で童女を死の運命から搔つ攫つう。

「何……」

剣冑の武士がその光景に驚嘆する。

「大丈夫か？」

私は彼女に安否を確認する。

彼女は泣いていた。

垣見が死んだ事を。

村人が死んでいく事を。

私は何の為に英靈になつた？

私は何の為に聖杯戦争に参加してまで衛宮士郎を殺そうとした？

私は切継の何に憧れたのだ？

正義の味方への、理想……。

私は無言で血に染まつた彼女の肩に外套をかけてやる。

「蝦夷か……死ぬがいい」

武士が私に剣冑の刀を振り下ろす。

「I am the bone of my sw
ord. (体は、剣でできている。)」
愛刀を取り出そうとする。

体が軋む。

拒否反応を起こす。

辛うじて出た柄を掴む。刀を受け止める。

だが一瞬で砕け散る。

「ハハハ」

思わず笑いが漏れる。

こんなのは初めて剣以外の投影を行った時以来ではないだろうか。

長年を共にした干将莫耶が見る影も無い。

こんな姿形を見真似て形だけを投影した剣では駄目だ。

今までの考えは考えは捨てねばなるまい。

そう

今の
この体はきっと……

剣胄で出来ているのだから

「メントありがとうございました。」

今回のお話は、どうだったでしょうか？ 明日から出かけなくてはいけないので少し突貫作業になってしまい雑前さが目立つかもしれません。それに前回から続けて同じような描写が少し多かつたかもしれない若干思います。

今回は、垣井さん、鷺沼さんの所をなるべく原作を壊さないように頑張りました。次回はどうアレが出てきます。

それにも、村正の武者同士の戦闘描写は難しいですね、地上シーンも空中も……それに、笑いのシーンも。

そういうえば、装甲悪鬼・村正のアンソロジーディスクがでますね。邪念編、すごく楽しみです。

それでは、少し遅くなりますが第3話にて再び太刀打ちしましょう。

妖刀・村正現る。（前書き）

遅くなりました！！（汗

といつとう出現する、真打剣胄達。

では、どうぞ！！

妖刀・村正現る。

「なつ」

それは一瞬の出来事であつた。
人を切り殺すつもりの九〇式竜騎兵の刃は九〇式指揮官機の鋼鉄
によつて阻まれた。

すかさず、九〇式指揮官機は反撃の機会をとえず九〇式竜騎兵の
腹部を切つた。

私は九〇式指揮官機を投影し、その刀で六波羅の九〇式竜騎兵を
退けた。

村は阿鼻叫喚の状態であつた。

狩る者と狩られる者の声がいたるといひに響いてい

私は、投影を解いた。

私としてみれば、鎧を投影した割には体の負担が無い。

「剣冑か……」

名は体を現すとは当にこの事であろう。その名の通り剣冑の投影
は不思議とこの体に良く馴染んだ。

だが、

この状況をどうする。

とても私の感覚では普通ではない。

この剣冑達が私を現界させた要因なのだろうか。

いや、違う。

この世界にはこのよつな物などまんと存在する。
では、何故。

その時、

うたがきこえた。

それは、ここに存在する全ての者に聞こえた。

生と死の選択を「」に課す命題として直に問つ

されば嘲笑の喚起する渦に喜劇の幕よござる上がる

嵐の夜に吼え立てる犬は愚かな盜賊と果敢に戦う

暖かい巣で親鳥を待つ雛は蛇の腹を寝床に安らぐ

木漏れ日の下で生まれた獅子は幾千の鹿を侵食し

せせらぎを聞く蛙の卵は子供が拾つて踏みつぶす

生の意味を信じる者よ道化の真摯な詭弁を聞け

死の恐怖に震える者よ悪魔の仮面は黒塗りの鏡

生命に問ひを向けるなら道化と悪魔は匙を持ち

生命を信じ耽溺するなら道化と悪魔は冠を脱ぐ

獣よ踊れ野を馳せよ歌い騒いで猛り駆けめぐれ

いまや如何なる鎖も檻も汝の前には朽ちた土塊

場が一転する。

村人が苦しみ始めた。

いや、村人だけではない。六波羅の兵士も様子がおかしい。

うたがつづく

奇跡を行う聖人は衆生を救い神を呪つて嘔吐する

黄金の兜の霸王は万里を征し愛馬と共に川底へ沈む

湖の美姫は国を捨て愛を選び糞尿に溺れて刑死する

弧赤児は蚯蚓の血を母の乳とし三夜して腹より腐る

生命よこの贊歌を聞け笑い疲れた怨嗟を重ねて

生命よこの祈りを聞け怒りおののく喜びを枕に

百年の生は炎と剣の連鎖が幾重にも飾り立てよう

七日のは闇と静寂に守られ無垢に光輝くだらう

獸よ踊れ野を馳せよ歌い騒いで猛り駆けめぐれ

いまや如何なる鎖も檻も汝の前には朽ちた土塊

幕が引かれた。

六波羅の兵卒が味方の竜騎兵に銃を撃ち始めた。

「な、なにが起こったんだ。」

反乱？

いや違う。この状況はそんな生易しいものではない。

獸だ。

獸同士が互いを殺しあつてているのだ。

「歌の所為か……」

自分は英靈といつ事もあつてなんとも無い。

そして、剣冑をまとつた六波羅の兵士達も正氣のよつだ。

空で突如爆発が起こつた。

空にいた、竜騎兵がまた墮ちた。

「銀色の剣冑？」

九〇式の様な同じデザインではない。この世に唯一つ。芸術品のよつな美しい剣冑がそこにあつた。

生命に問い合わせるなら道化と悪魔は匙を持ち

生命を信じ耽溺するなら道化と悪魔は冠を脱ぐ

生と死の狭間に己を笑い恍惚として自ら走るる

さすれば夜明けの嘆きを鐘に神曲の幕よいざ上がる

空中に静止する銀に、六波羅の兵士達が集団で掛かる。

「馬鹿が」

あれは、相手が一騎だから多数で掛かれば何とかなる何といつ生易しい物ではない。

私は見た瞬間に理解する。

見たツルギを解析し、貯蔵する私だからこそアレを理解する。

妖刀・村正

私がいた世界では世界では、あの徳川に仇を成したとされる村正である。
だがこの世界では、剣が剣冑へと姿を変え存在していた。

鬼に逢うては鬼を切る

仏に逢うては仏を切る

数ある剣冑の中でも、村正は違っていた。
ツルギの理がそこには有つた。

束に掛かるうが無意味
銃を撃とうが無意味

明らかにレベルが違う。

村正は、他の剣冑とは格が異なつてゐる。

六波羅の剣冑はすべて同じ形である。それに比べてシャープなデザインの村正はただ一騎。

「そうか」

六波羅のがいわば工場で型に流されて量産された刀だとしたら、あの村正は刀鍛冶が作り出した名刀。

そして、仕手……いわば乗り手も強い。

訓練と言う名の量産された兵士に對して、村正の仕手は當に歴戦の強豪とでも言つべきか

墮ちた兵士は、先ほどまで味方だった兵士に村人に……蟻の巣に落ちた翅を? がれた蜂というモノか、竜騎兵は無残にも喰い散らかされた。

「貴様は一体、何なのだア!! 銀の魔王ツツ!!」

残つた鷺沼も無残。他の剣冑よりも長く持つたが片手で落とされた。

うたはづづく

せつりくはづく

「私をここに呼び寄せたのはコレか」

今までにも英靈として呼び寄せられた原因と言つものは幾つもあつた。

人が滅亡の危機に瀕した際に呼ばれる、英靈。

人を守る為に、人を殺すと言つ矛盾。

「だが、私は人を守ると決めた」

それにも、何という運命か……。

世界を滅ぼしかねる魔劍といつのは幾つも有つた。それを貯蔵し、

対する聖劍を呼び出したことはある。

だが、世界を滅ぼしかねる日本刀といつものに会つたのは始めてである。

自分のルーツとも言える国の妖刀。

これはあの英雄王でなくとも、自分の倫理觀とは別に心が踊るものがある。

往こうかと思つた所に、

もう一つの影が現れた。

赤い剣冑。

「あれは……」

村正。

もう一つの村正であつた。同じ理を秘めた剣冑。

私が手を出す事も無く、銀と赤は交叉する。

初めからそつあるべきものだと交叉する。

流星の如く

赤の星は餓狼めいて獰猛に。

銀の星は雌鹿めいて軽やかに。

咆哮が夜空を叩く。

笑声が夜空を渡る。

赤の武人は慟哭の響で太刀を繰り出し、

銀色の武人は抱擁の柔らかさせそれを流す。

美しい。

私はそう感じてしまつ。これは殺し合いだそれなのに美しい。

剣冑同士の戦いに。

これまでそのようなことを抱いた事があつただろうかあのブリテンの王でさえ、
紅い槍の使い手でさえ、
すばらしき刀術を極めた武士でさえ、
私の心をかき乱した事は無かつた。

「何故」

何故私はここまで心揺れるのか、
何故私は涙を流しているのか、
邪道を極めた私が、何を持つて正道に憧れる……。
いや、違う。

私は武人同士の戦いになどこれっぽっちも憧れてなどいない。

ツルギだ。

ツルギ同士の刃音に憧れているのだ。

剣の音が、剣冑の音が、私に教授する。

そう私はただ、武士でも仕手でもなく、一重に刃でありツルギであり、鍛冶士であった。

気が付けば、赤は地に墮ち

銀は赤を見下ろしていた。

銀は赤の野太刀を手にすると七つに碎いた。

欠片は橢円をしていた。そして空色へと霧散して消えた。

妖刀・村正現る。（後書き）

前書きにも書きましたが遅くなり申し訳ありませんでした。
それにも、パソコンの無い環境と言つものがどれほど苦しい
かを実感した8月でした。

いかがでしたでしょうか？

これにて、村正のプロローグ部分が終わりました。
これ以降、オリジナルの話を挟みつつ村正の世界にエミヤが乱入
していく話を考えてします。

これから話をする、井上真改と村正の話は原作道理で展開させます。エミヤが介入し始めるのは、二章の長坂右京の話からとなります。

実は、次の話は完成しているのですが、オリジナルの話となりますのであまり満足する出来には至っていません。なんとか、次の話を修正して投稿させていただきたいと思います。

皆さんの「メント」には毎回感想を頂いて、非常にありがとうございます。本当にありがとうございます。

では、今回はこの辺で筆を置かせていただきます。

村正・邪念編を非常にやりたい……

遅くなり、ホントに申し訳ありません……

前回までがプロローグ、今回からが1章といつ形となっています。
そして、2章……実は半分ぐらい出来ているのですが……「いぢらば、
村正本編の道筋とあつた話となつていてるので、出筆スピードが早か
つたのですが、いきなり1章でオリジナル路線に入ろうとしてその
難しさから断念しかけました。

しかし、2月に村正関係の商品が発売された事もあり、今回短いで
すが書いた所を上げました。

常々、足りなこといろいろありますがあれからもよろしくお願いし
ます。

―― 気が付けば、焼け野原にいた。

村は一面の廃墟に変わっていて、とても現実には思えなかつた。

獣達はその身を業火に焼かれ、墮ちた鎧冑の骸はこちらを睨んでいるようであつた。

……その中で、原型を留めているのは自分だけである。

鼻緒が切れた草履を引きずりながら歩く。

皆が狂う中どうして、自分だけが生き残つていたんだろう。

生き残つた自分が運が良かつたのだろうか。

それとも、自我を無くし痛みも感じずに灰になつた皆のほうが運が良かつたのだろうか。

どちらかは判らないが、自分だけが生き残つた。

生き延びたからには生きなくちゃ、と思った。

自分には大きすぎる大きな外套を抱くように抱えながら歩く。

不思議と外套に覆われている上半身は無傷であつた。

だが、下半身はボロボロであつた。既に片足は言つ事を聞かなくなつていた。

まず、助からない。そう思つた。

周りのものと同じように地獄の業火でこの身を焼かれてしまつたのだろう。

そうして倒れた。

だが、身体は地面に叩きつけられる寸前で止められた。大きな手だつた。

だが、鋼鉄のようないい皮膚であつた。

……その顔に見覚えが有つた様な気がする。

ただその人は言つた

「生きていて、ありがとう」

力が無い。

この世界に呼ばれて召喚された私には今までどおり戦う事は出来なかつた。

この世界では、如何なる宝剣も魔剣も聖剣も存在しない。どんな剣であろうが剣胄の前では意味を成さない。それ故に力を持つ剣は生まれることが無かつた。それがこの世界の理である。私の持つ幻想は、この世界の幻想の前には意味を持たないのであるうか？

英靈の力は、呼ばれた世界の認知度に比例する。だが、基本的な戦闘力は保持している……はずである。特に、私の持つ力は無限の剣製。内包世界は外界の影響を受けない。それが外界の影響を受けている以上、私の召喚に何らかの不手際があつた可能性が高い。

だが、すでに召喚されてしまつた以上いくら仮説を唱えようが意味が無い。不幸中の幸いといえば、この世界の最大武力が剣胄……ツルギであったという事であろう。

「そう、私は剣胄を知る必要がある。」

鎌倉

この大和においての実質首都の役割を担う大都市。六波羅が政権を置く故に比較的治安が安定している。だが、どんな安定した土地においても暗部は存在している。

「そう、我々は優れた人種なのだ。むしろ、我らは優遇されるべきである。」

怪しげな集会だと思う。

「我々は、約束を取り付けた。かの聖地に我々の為の国を建国しようではないか。」

だが、藁にもすがる思いで集まつた蝦夷の人々は、そんな怪しげ

な言葉だとしても乗るしかないのだ。

「どう? 見事なもんつしょ?」

そう話しかけてきたのは、帽子をかぶりメガネをかけた少女である。私をここに招いた当人である。

「何故、私をここに?」

「お兄さんからば、甲鉄の匂いがしたからね。きっと名だたる鍛冶師じゃないかと思つてね。」

スンスンとわざとらしく匂いをかぐ真似をする。

「きっと、大和にいたんじやこれからはきっと口の田を浴びる事は無いと思つて招待したんだ。」

周りを見ると、どうもまともではない連中ばかりが集まっているように見える。

「残念ながら、私は剣冑を打てるほどの力を持つてはいないよ」

残念ながらこれは事実である。現状の私では、人刀一体とでも言えぱいいのだろうか……剣冑としての強さも、剣冑使いとしての武人の強さも全く足りてはいない。

「そうかい? でもね……」

少女は言つ。

「お兄さんはね、きっと良い鍛冶師になるよ。根拠? そうだね……お兄さんは剣冑のカミサマに愛されているんだよ」

その時、私は殺氣を感じた。誰からでもない、目の前のこの少女からだ。だが、その気もあつという間に抜ける。

「お兄さん。良い鍛冶師になりたいならね。コイツらに付いて行くといいよ。きっと、いい所につれていくてくれるはずだよ」

やつ言つと、少女はわつたとこの場所から出て行つた。

子連れ、英靈H//ヤ（前書き）

更新が遅くなり申し訳ありません。

オリジナル小説を書くことに手を出した所為で遅くなりました。

ただそのおかげでオリジナル展開が若干上手になった（？）気がします。

タイムライン上では、村正勢は今、雄飛の話を進行中です。

「鈴！」

私は集会場から離れた先の茶屋で待機させていた少女を呼んだ。彼女は私に向かつて手を振る。

鈴は村正によつて崩壊させられた村の唯一の生き残りであった。村の惨状は常人であれば目を覆いたくなるモノであった。狂つた村人が軍人が互いに殺し合い、食い合い、そして誰も残らなかつた。そんな中鈴が生き残つた。

それは、私が彼女に聖骸布をかけてやつたからではないか。私はそう思つている。

ただ、彼女は記憶を失つていた。4歳ほどの鈴にはあの光景は心を壊してしまつほど強烈であったのであらう。それはそうだ、鈴の両親、知り合い諸共に殺しあつたのだ。

惨事の後私は鈴を拾い上げた。身も心も傷ついた鈴に、かつての自分自身を照らし合わせてしまつた。まるで自分が切嗣にでもなつたような感覚であった。ただ1つ違つるのは、彼とは違い私にはまだやる事があるということである。

私は鈴を孤児施設に預けようとも思つた。だが、鈴はそれを望まなかつた。懐かれてしまつたのである。

だが、この先私の行く場所に鈴を連れて行く気にはなれなかつた。私は、あの怪しい蝦夷達に同行しようと考えていた。それには、大和人の鈴は目立ちすぎるようと思える。

「鈴、私はしばらくなつて出かけようと思つんだが……」

「やだ」

鈴は次に出る言葉を予測したのであらう。顔を横に背けた。

「まったく、キミは……」

私は、ため息をこぼす。このやり取りも幾度となくやり通してきた。だが一向に彼女は顔を縦に振らない。

私とて、鈴を置き去りにしたほうが彼女自身安全なのではないかとも考えた。私が行く道は戦いしか起こらないであろう。だが、置き去りにして誰かが助けてくれるほど、この大和という国は豊かではない。女子おなこが誘拐され身売りされている話などもよく聞く。何故か私は鈴を見捨てられずにいた。

私はこの少女を赤と黒のコントラストな我侶でおっちょこちょいな彼女に重ねてしまっていた。もちろん、彼女との繋がりがの残っている訳ではない。だが彼女を思い出すたびに、目の前の少女・鈴を置いていく気持ちにはなれないのであった。

私が思いにふけっている間に、鈴が瞼をこすり頭を横に揺らす。

「鈴、眠いのか？」

「うーうん。なんともない……」

そうは言つが、体はもはや限界のようであつた。仕方あるまい、この話は今日はここまでであらう。私は鈴をおぶる。

「さて今日の宿を探さなくては」

背中に感じる、小さな温かみが今の私にはとても心地よかつた。

「一」、「コレは……作つた料理人でてこい！」

民宿と小料理屋をかねる小さな店。男は料理を一口呑むと大声を出す。

「はい、何でしようか？」

私は、怒鳴り声を受けて男の前に顔を出す。幸い客は、この男一人きりであった。

「つまーい……うますぎる。ワシはこんな料理を一度も食べた事がない……」

私こと、英靈エーリングはこの店で料理人として雇われていた。

このような経緯にいたつたのには理由がある。簡単にいつてしまえば、金がなかつた。そもそも、眠ることすら必要ない私だが、鈴

の為に野宿を鎌倉に着くまで何度もかした。だが、鎌倉で野宿をするにはのは無理があつた。警官に見つかれば即刻、職務質問であろう。宿がない、金がない……とくれば、残る手段があるとすればただ一つ。身体を売るしかない……もちろんヤラシイ意味ではない。ツルギを打つ他に私の出来る事があるとすれば食事を作ることだ。交渉を持ちかけた宿の主人は、最初険しい顔をしていたが厨房を借りて1品料理を作つてみたところ、快い返事を貰う事ができた。今私は紛れもなく給仕者サバントであつた。

「エミヤ君、ウチで働かないかい？ もちろん、住み込みで給料も出やう」

店主は先ほどの客の反応を見て、私にそう持ちかける。

「すまない……私には他にやる事がある」

「そうかい」

店主は実に残念そうであつた。

給仕も一通り終えたところで、私はこの先のことを考えなくてはいけない。恐らく、蝦夷の集団は明日にも旅立つのであらう。私はその一同に加わらうと思つていた。だが鈴がいる限り難しいのではないだろうか。

私は、今夜借りる事が出来た部屋に戻る。

「鈴……戻つたぞ」

だが部屋に鈴の姿はなかつた。

子連れ、英靈H//ヤ（後書き）

まだ少しH//ヤの単独ルートが続きます。お付き合いください。
オリジナル展開を書くと、原作様の偉大さがよく分かります。H//
ヤを立てつつ村正を殺さないよう（話的に）にする、難しいですね。

そういうば、皆さん妖甲秘聞錆はお読みに成られましたか？ 私は
ドラマCDも聞きましたが、こちらはかなり凄かったです。本編で
明かされなかつたアレについて触れられていて私は非常に感動しま
した。

上でも宣伝いたしましたが、オリジナル小説も書いていますもしよ
ろしければご覧下さい。 <http://ncode-syosetu.com/n1155s/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0307n/>

装甲鍛冶師・衛宮

2011年4月7日22時55分発行